

おっばい序列一位の
後輩ちゃんに
俺のきりんをぶちかましてきた



●REC

はあ…
今日も綺凜ちゃん可愛いな…

あと一周ですっ

うん



まだ部一年生だっというのに

おっぱいもあんなに大きいし…

あやとせんぱい

たゆん

まさしく俺の理想の嫁だぜ



※イメージ画像です。

はあ…俺が天霧だったら

綺凜ちゃんと

イロイロできるのに

ジ〜〜ッ

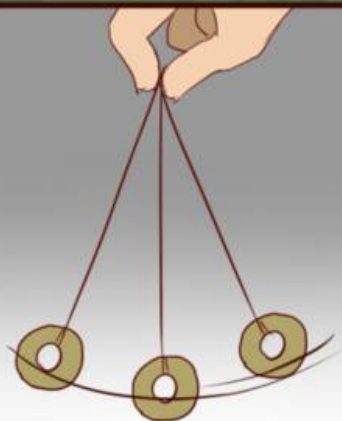


綺凜が好きな
ただのモブ生徒

例えば催眠術とかで

俺を天霧だと綺凜ちゃんに

信じこませられたら…



ってそんな

うまくいく訳ねーか…

後日、念のため試してみた

オレか
あやとだぞ

あやとちゃんにハイ♡

なんかうまくいった





「綾斗先輩、控室に用って…何か忘れ物ですか？」



「じゃあ…ちょっと綺凜ちゃんのおっぱいを見せてもらってもいいかな？」

「ふえっ!? わ、わわわわ私のおっぱいですか…?」



「いや、実は綺凜ちゃんにお願いがあるんだけど…聞いてくれるかな？」



「はい！綾斗先輩のお願いだったらなんでも聞きます！」



「あの…本当に全然たいしたものでないですけど…」

ギョッ…



「やっぱりダメ、かな…?」



はわわっ

「い、いえっ！駄目ってわけじゃ！むしろ綾斗先輩になら見せても…って、ああっ!?! 私ったら何言ってる…!」

「わ、私のおっぱいで良ければ見てくださいますかー!」

「おおっ!」

ぷるんっ



「おーすげー…

まさか本当に綺凜ちゃんのおっぱい拝めるなんて…マジ感動だわ」

(はうう…綾斗先輩におっぱい見られちゃってる…!)

「やっぱり綺凜ちゃんのおっぱい大きいね…本当に「学生？」

「は、はい…すいません…」

「いやいや、別に謝らなくていいよ。むしろ誇るべきだよ、じねは」



「…ねえ、ちょっと触ってみてもいいっつーちょっとだけ」

「は、はいっつーっ！」

「おっ…すげ…柔らけー…」

「弾力もあるし、触り心地最高だよ、これ」

「あ、ありがとうございますっ…」

ふいゅん



「ハア…ハア…すっ、

綺凜ちゃんのおっぱい…ハア…ハア…ハア…」

「あっ…綾斗しえんぱい…あ……」

あ

は

も
に
ゃ

ぐ
に
ゃ

も
に
ゃ

ぐ
に
ゃ



「綺凜ちゃんごっつ...」

男の人におっぱい揉まれるの気持ちいい?」

「あのその、」

恥ずかしくてよく分からないんですけど...

綾斗先輩に喜んでいただけるとは

すごく嬉しい、です...」



「ああっ…綺凜ちゃん可愛いよ…っ！」

「ふああっ…綾斗しえんぱい…っ！」

「ね、綺凜ちゃん…」

「続き、ゆっくりしたいから「ロンドン」座…っ！」

「は、はい…っ！」



「すうーはあー…すうーはあー…」

ああ…綺凜ちゃんって本当イイ匂いするなあ…」

「はうう…」

「おっぱいも太もももすごく柔らかい…」

俺綺凜ちゃんのカラダすごく好きだなあ」

（綾斗先輩に体を触られて…感じちゃってる…。私、エッチな子だ…）

もみもみ

さわさわ

さわさわ

「と」で綺麗ちゃん、ちよっと「」見てくれるかな

「ふえっ!?!」 「じ、これ綾斗先輩の…?」

「おっきからずっと勃起しちゃって…」

ちよっと綺麗ちゃんの手で鎮めてもらってもいいかな?」

「わ、私の手で、ですか…?」

ビクッ

ビクッ



「じゅん、じゅんという感じで握って…おっ…イイ…」

「あっ、あっ」

「オッオッ…綺凜ちゃんちんぽ握るの上手いね…
やっぱいつも刀を握ってるから上手いのかな？」

「い、いえ…いつも握ってる刀より」

「綾斗先輩のおち…んちんの方が太いです…」

ビク
ク
ソ
ツ
ギ
ャ
ッ



「あー…すげーいいよ綺凜ちゃん、超気持ちいい…」

(綾斗先輩のこれ、すごく熱い…)
びんびん…つん…つん…今はまだおぼろげなイメージだ)

モ…
モ…

ジュ
ジュ

ジュ
ジュ

ジュ
ジュ



「ああっ！綺凜ちゃん！綺凜ちゃん！」

「あんっ…綾斗せんぱい…」

「ハア…ハア…そろそろイキそう…」

「綺凜ちゃんスピード上げてー！」

「は、はいさー！」

ビクッ

〜

ぐにぐに

ふにゅん

しゃんしゃん

しゃん



「あ、綺凜ちゃん、あ、あー…イク…！」

「わ……！」



「ふう…めっちゃ精子飛び出たあ…」

「綺凜ちゃんの手口すごく気持ち良かったよ♡」

「ほ、本当ですか？良かったあ…」

モ…

モ…

ヒク

ヒク



「あれ？手」キでいったばっかなのに全然勃起おさまらないや…
やっぱこの日のためにひと月抜かずに精子溜めてたからかな」

「あ……じゃあまた手でやりますか？」

「ん〜そうだなあ、

今度は綺凜ちゃんのおっぱいでイキたいなあ」

「ええっ!？わ、私のおっぱいですか……?」

っん

っん



「やっべ、ちんぽめっちゃ興奮してきたあ〜♡」

（あうう…私、ちゃんと綾斗先輩を気持ち良くできるかな…？）

ドキ
ドキ

ビクンッ



「おおっ…ちんぽ入ったあゝ♡
綺凜ちゃんのおっぱいあったかいね…♡」



（はうう…綾斗先輩のおちんちんが
おっぱいの間でびくびく脈打ってますう…）

ズボン…

「……」

「あれ……？綾斗先輩泣いてる……？
もしかして私上手くできてないのかな……？」

「あの……綾斗先輩、
私ちゃんと気持ち良くてできてますか……？」

「うん……うん！」

「綺凜ちゃんのパイズリ最高に気持ちいいよ！」

「ちょっと感動で涙出ちゃったよ……」



じゅぽっ

ぬぽっ

「ハア…ハア…綺凜ちゃんのおっぱい…」

「あっ……」

「…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…」



ぐ
びんぐ

どっぽっ

あッ

「じじい…綺凜ちゃんのおっぱいが気持ち良すぎて
射精止まんないよ…!」

（あうう…私のおっぱいに
綾斗先輩の熱いのがたくさん出てる…!）

ドクン…

ドクン…



「はあ…はあ…綺凜ちゃんのパイズリすごかったあ…」

（綾斗先輩、とても幸せそうな顔してる…
頑張ってた良かった…!）

「やっぱり綺凜ちゃんは剣術だけじゃなくて

おっぱいの序列も一位だね♡」

「ぞ、そんな、私なんて全然…」



「綺凜ちゃんのパイズリすごい気持ち良かったから
お礼に綺凜ちゃんも気持ち良くしてあげるね♡」

「ふえ…？綾斗先輩…？」

「その前にまず服脱いじゃおうね！

まず一枚目〜♪」

スリッ
ニ

スス〜





「二枚目〜♪
フホ、可愛いパンツだね〜♡」
「う……！」

ズル
ズル

ズル
ズル

「三枚目〜♪」

おおっ！綺凜ちゃんのおまんこつるつるだあ〜♡

おっぱいは大人だけどここはまだまだ なんだね！」

「~~~~~！」

スルッ

スルッ



「指入れるよ〜？入るかな〜？」

「わわっ！？」

あ、綾斗先輩…！？」

「お〜入った入った！」

「す〜いい、めっちゃヌルヌルしてるよ〜！」

ズポ…



「指2本入りそう…」

「お、入った入った♡」

「あっ…はああ…」

「綺凜ちゃんのこと、すごい音鳴ってるよ♡」

「エッチな音が♡」

「は、恥ずかしいからあんまり聞かないでください…」



「綾斗せんぱは…あ…駄目、あ…」

「あれ？綺凜ちゃんイキそうっ？」

「じゃあもっとスピード上げるね！」

「あ、駄目…です、

今そんなことされたらあ…っ！

はじっっっっっっっっっっっっ！



「おーイったねえ綺凜ちゃん、めっちゃ糸引いてるよ♡」

「あ……はあ……はあ……」

「ねえ…綺凜ちゃんの処女、俺が貰ってもいいかな？優しくするからさ…♡」

「は…はい……私のでよければ、その…も、貰ってくださいいな……」





ビクソッ

ビクソッ

「ハア…ハア…」

「いくよ…おちんぼ入れるよ……っ？」

「は、はい……」

「おっ……きっつ……！
けど一気に奥まで入れちゃうよ……！」

「す……び……ん……」



「お……入ったあ……！
やった、綺凜ちゃんの処女まんこゲットお……！」
「あ……う……う……い……い……、痛い……」

「すこ…ちんぽ動かすと綺凜ちゃんのおまんこが
ぎゅっと締め付けてくぬぬ♡」

「あのっ…綾斗先輩…
まだあんまり動かないでください…!」

ずち
ぱっ

ぬち
ゆ

ギ
シ

ギ
シ

タ
ッ

タ
ッ

タ
ッ

「いや、無理だってw

「こんな気持ちいい」まんこにちんぽ入れたら
腰が勝手に動いちゃうよw

「そ、そんなあ…!」





「あゝ気持ちいい気持ちいい〜！
綺凜ちゃんのおっぱい揉みながら
腰動かすの最高に気持ちいいよ〜」

（あ…また綾斗先輩におっぱい触りなげやっ…）

「あっ…ヤバい、そろそろイキそう…！」

「このまま綺麗ちゃんの中に出してもいい…？」

「あ……でも、」

「このまま中に出さねたら赤ちゃんだけおぼれちゃうかも…！」



「大丈夫、大丈夫だから…！」
「ペース上げるよ！」

「は、ははは…！」



「~~~~~」

「~~~~~」

~~~~~

~~~~~

「はぁ…はぁ…まだ出てる…
全部出るまでしばらく入れたままで…」

ドクン…

ドクン…

はっ

はっ



（ああ……綾斗先輩の精子ははらみださなかった…
お腹の中が綾斗先輩の精子で溢かっているみたい…）

「ああ…なんかまだちゃんぽ抜きたくないな…」

「このままもう一回してもいい？」

「ふえ…も、もう一回ですか…？」

「俺綺麗ちゃんとずっと繋がってほしいんだ…
だから、ね、お願い♡」

ゴホッ



「は、はい…大丈夫です…」

「綾斗先輩と…ずっと繋がったまま…♡」

「ハア…ハア…綺凜ちゃん…綺凜ちゃん…」
「んっ…綾斗、せんばいいっ！」
（綾斗先輩と私…繋がってる…♡）



ギン

ずちゅっ

まっちゃん♡

まっちゃん♡

ぬちゅっ

ギン

ギン

「綺凜ちゃんのおっぱいは本当に揉み心地良くて…俺すっくと揉んでいたいなあ…」

「あ、あの……私のおっぱいは綾斗先輩のものですから…いつまでも触っていいです…と…」



ギシ

ギシ

はあ

はあ

ふたちゃん

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ

すっ
すっ
すっ

ギシ

ギシ

「うっっっ…綺凜ちゃん綺凜ちゃん…！」

「はわわ…綾斗先輩のおちんちんが

お腹の中で大きくなってる…！」

「俺綺凜ちゃんの中…」はははははから…！
綺凜ちゃん…！俺は好きだよはははははから…！俺はさ…！」

「は…は…はお願…！」





「あぁっ…綺凜ちゃんイクよ！
ぐわっ…ぐわっ…ぐわっ…
「…びしょっ…」

「てっぺん」
ぐわっ
びしょ

ぐわ

てっぺん

ぐわ

てっぺん

てっぺん

ぐわ

ぐわ

びしょ

びしょ

びしょ



「ハア…ハア…」
ほら、綺凜ちゃんの中が
俺の子種でいっぱいになってるよ…」
「あ…綾斗先輩の…赤ちゃんの素がたぐさ…」

は

がく

もにゅ

もにゅ

ドク

ドク

がく



「ハア…ハア…」

念願だった綺凜ちゃんとの初セックス…

超気持ち良かった♡」

（私、綾斗先輩と…しちゃったんだ…）

はあ

はあ

ヒッ

ヒッ



「ちゃんと種付けできたかな？
うまく着床するのいいよね♡」

綾斗先輩との赤ちゃん……
本当にできちゃうのかな……？
そしたらもう戦えなくなっちゃうな……

ゴッポッ

トロ……



「そっだ！
綺凜ちゃんの処女喪失記念に
写真撮っておこうね♪
綺凜ちゃんピースして〜」
「ふぁい……」

カミヤ
カミヤ

「綺凜ちゃん疲れてるみたいだけど大丈夫？
やっぱり〇学生で初セックスは早かったかな？」



「すみません…いろいろと初めてのことが多くて…
なんだか頭がくらくらしちゃいました…」

「なんか無理させてごめんね…
強引に中出しまでしちゃって俺最低だよね…」



「い、いえ！」

私…綾斗先輩と特別な関係になれて嬉しいです…
だからあまり気に病まないでくださいね」



「やっぱり綺麗ちゃんって優しいね...」
俺綺麗ちゃんが初めての相手で本当に良かったよ♡

「んっ……♡」

わ、私も綾斗先輩が初めての相手でも良かったです……」



「あんなに可愛いわ……」

「ああ……なんか綺凜ちゃんの写真見て癒されたら
またムラっとしてきちゃったよ……」

「ふあ、まだおっぱいでするんですか……？」



「綺凜ちゃんは休んでいいからさ……
おっぱいだけ使わせたくはないからさ……」

「……いっしょに」

「ハア…ハア…綺麗ちゃんのおっぱいは
俺のちんぽで犯し込んでおめえめえからならぬ…」



（あう……綾斗先輩のおちんちんが
おっぱいの中から出たり入ったりしてる…）



「あーっ」

「あーっ... 綺麗ちゃん綺麗ちゃん...
「あーっ」

ギシ

ギシ

ジュジュ

ジュジュ

「あー…出た出た……」

「やっぴの羞恥ぢゃんのおっぴの羞恥ぢゃん」



(はわわ……)

綾斗先輩の精子がこんな感じ……

「あゝこんなところまでひっかかっちゃったね」
「あ……綾斗先輩大丈夫ですよ！
自分で取れますから……」



「ささなごのささなご」
「ささなごのささなご」



「はい、綺麗になったよ♪」
「ありがとうございます！」
「やっぱり綾斗先輩は優しいですね……！」

「ところで綺凩ちゃん、

俺のちんぽもペロペロ舐めて

綺麗にしてもらっていいかな？」

「ぶえっ!?舐め……て、ですか……?」

「やっぱり抵抗ある？」

「そつたよね…俺のちんぽ汚いもんね…」

「い、いえ!そんなつもりで言ったわけじゃ……!」

「あの、私やりますから!」

びんっ



「んっ…れろ…れろ……」

「おっ……ヤバイ…これ、超イイ……!」

(綾斗先輩のおちんちん……すごい匂いがする……)



「ハア……ハア……」

綺凜ちゃん、おちんぽくわえて……

お口でおちんぽく気持ち良くしてくくれるかな……？」

「ふふふ……」





「んっ……ひむっ……」

「あやどひえんばい……きまざいれぬか……っ」

「うん……うん……」

んっ？

んっ
んむっ



「あっ…綺凜ちゃん…
あっ…駄目だ、気持ち良すぎてもう…っ！
俺のおちんぽミルク飲んで綺凜ちゃんっ…！うっ！」
「んぎゅっ…っ」

「うっ……すげえいっぱい精子出てる……！
ごぼちないように全部飲んで……ね……！」
(すっ……)

綾斗先輩の精液が次から次へと溢れてくる……)



「ふう〜綺凜ちゃんが可愛いから
精子いっぱい出し過ぎちゃったよ…」

「ちよっと綺凜ちゃんのホルスタインおっぱいで栄養補給しよう〜」



れる…

「ほ、ホルスタインって…」

「私そんなにおっぱい大きくないですよ〜…」

「んっ……ちゅぽっ……ちゅぽっ……
んっ綺凛ちゃんのおっぱいおいちいねっ♡」

んっ
ちゅぽっ

ちゅぽっ
ちゅぽっ

「あっ……ん……
綾斗先輩っ……吸い、過ぎっ……ですっ……」



「綺凜ちゃんの乳搾り〜♪
おいしいミルク出ないかな〜?」



「あ、あの綾斗先輩、
赤ちゃんができないとお乳は出ませんよ」

「じゃあもっと子作りしないかね」

今日は綺麗ちゃんが俺のちんぽの形を覚えるまでハメるよぉ♡



「……いっしょに」

「ほら、しっかり俺のちんぽの形を覚えてね？」

(綾斗先輩のおちんちん……)

太くて固くて……

私の中でドクドク脈打ってる……)

たゆんっ

ズ
プ
プ
…

キッ



「あん……綾斗先輩……綾斗先輩い……！」

「綺凜ちゃんもおまんこ感じ始めたみたいだね♡
もうすっかりHな女の子だw」

「はう……綾斗先輩のおちんちんがこすれるたびに
お腹の奥がきゅんってなる……」



「あっ…あーイキそう…！」

「綾凛ちゃんの腰使いが良すぎてもう…！」

「ふああっ…綾斗しえんぱい…！」

「ハアハア…綾凛ちゃんもイキそうなんだね？」

「よおし、俺と一緒にイこう！」

「あ…綾斗先輩と一緒に…！」



「……うっ……うっ……うっ……」

「綾斗先輩の中……」

「ふわあっ……!!」

綾斗先輩好き……

大好きですう……!!」



「へ…絞り取られる…！」

（はう…綾斗先輩の精液がいっぱい…！）

はわわ…



ドク
ン
ッ

ドク
ッ

「ハア……ハア……」

「あー……超気持ち良かったあ……」

「綾斗先輩、」

「私もいっぱい気持ち良くなれました……」

「ありがとうございます……♡」



「綾斗先輩、今度は立ってするんですか?」

「うん♡」

「綺凜ちゃんが元気な赤ちゃん産めるように♡」

「いろんな体位でいっぱい中出ししないとね♡」

「もう…綾斗先輩ったら…♡」

「まだ赤ちゃんの話は早いですよ?」



「綺凜ちゃん好きだよお……！」

「一緒にもっともっと気持ち良くなろうっね……！」

「私も綾斗先輩のこと好き……大好きです！」

「また私の中にいっぱい出してください……ねっ？」



「♡……じじい」
「……じい」

「……じい……じい……」



ふん
ふん
ふん
ふん
ふん
ふん

「ハア…ハア…」

「このまま繋がったままもう1回やろっか?」

「はい…♡」

「一緒に子作り、頑張らしましょうね♡」





「今日綺凜ちゃん朝練来なかつたけど
どうしたのかな…」



「あっ!?!」

ヒク

「ぎ、綺凜ちゃん!? こんなところで一体何をしてるんだ...?」

「ええっ!? なんて綾斗先輩がもう一人...?」

「綺凜ちゃん何を言っているんだ?」

綾斗は……天霧綾斗は僕だよ?」



(やべ〜本人来ちゃったw

でもなんか余計に興奮するw)

「そんな…じゃあこっちの人は…」

「あ、あなたは誰なんですか…?」

「俺っ俺はただの綺凜ちゃんのファンで…」

「あ、もしかして催眠解けちゃったかな?」

「さ、催眠……?」



「綺凜ちゃんとHしたかったから俺が天霧君だと思ひ込むように催眠をかけたんだよ」

「え、そんな…私ずっと綾斗先輩だと勘違いして知らない男の人とHしちゃってたの…?」

「え、そんな…私ずっと綾斗先輩だと勘違いして知らない男の人とHしちゃってたの…?」



「うう…こんなのひどい…」
「初めてだったのに…!」
「綺麗ちゃんごめんね…本当「ごめん…」
「謝りながら腰振りならどんだねらっ!」

せ
も

「あと一回だから…ね？」

あと一回だけ中出しさせて…っ」

「あうっ…もう駄目ですみょう…」



「でも綺凜ちゃんも気持ち良くなってるよね？」

大好きな先輩に見られながら一緒に気持ち良くなるっ」

「いやあ…綾斗先輩に見られながらなんて…そんなこと…」

「うっ…綺凜ちゃんのおまんこすっこ締め付けてくる…
綺凜ちゃんも俺のちんぽで

いっぱい気持ち良くなってるわね…
俺嬉しいよ…」



「ちがっ…気持ち良くなってなんか…ふあっ…♡」

「やだ…綾斗先輩の前でこんな恥ずかしいことしてるのよ…
体がとんとん気持ち良くなってきちゃったの…」

「あぁっ…俺もうイク…っ！
綺凜ちゃんも一緒に「イク」っ！一緒に…っ！」
「や…駄目…駄目ですっ…っ！♡」



「あ…駄目…っ！
イクだっ…っ！イクだっ…っ！♡」

「はあ…はあ…あー最高だった…」

「綺凜ちゃんとのH、すごく気持ち良かったよ♡」

（はわわ…綾斗先輩の前で…イっちゃった…）

「綺凜ちゃん、なんかお楽しみの中邪魔してごめんね。」

「ごめん…」

（あ…綾斗先輩が…行っちゃった…）

「綺凜ちゃん、天霧君もあ言ってることだし」

「この後もゆっくりHを楽しもうか♡」

「はっ…お、お願いします…♡」

ドクン…

ドクン…

ふに

ふに

ふに

